



子育て情報 12月号

平成29年 12月
栢山女学園大学附属幼稚園

クリスマスの夜に幸せの呪文を

園長 横尾 尚子

12月が始まりました。12月と言えば「クリスマス」。そう言っても過言ではない程に、クリスマスは日本の冬の風物詩として定着しました。街を彩るクリスマス・イルミネーション。ちょっと贅沢なクリスマスケーキにプレゼント。意匠を凝らしたクリスマスカード。それらは、師走の喧騒をしばし忘れさせ、心をほっこり温めてくれます。クリスマスカードには、清らかな天使が描かれているものが多いですね。神様のお使いとして、「幸せ」を届けてくれる天使たち。天使は、私たちのすぐそばにいます。

大学院を出て短大の教員になったばかりの夏、学生と「重度知的障害児の親子サマーキャンプ」にボランティアとして参加しました。そこで、花ちゃんとお母さんと小学生の2人のお姉ちゃんに出会いました。花ちゃんは、バギー(乳母車的一种)の中で、クネクネ、クネクネと動いていました。「ずいぶんたいへんそうな子だなあ…」と思いました。お母さんは、花ちゃんが生まれてからずっと一人で、3人の娘を育ててきていました。肩代わりした荷物の驚く程の重さが、その一端を物語っているようでした。

花ちゃんとの1泊2日は、予想以上に「たいへん」の連続でした。花ちゃんは、24時間お母さんを必要としていました。何処へ行くにも、何をすることも、お母さんを必要としました。花ちゃんは、自分でうまく食物を噛むことができません。お母さんは、花ちゃんのわずかに開いた口にスプーン一杯のカレーを滑り込ませます。それから大急ぎで、顎を支えて噛み噛みさせます。そのタイミングがちょっとでも遅れると、口の中からカレーが吐き出されて、容赦なくお母さんの顔に飛び散ります。しかもその間をぬって、お母さんは自分の口へもカレーを投げ込みます。そして一緒に食べながら、「おいしいね」「上手になったね」と笑うのです。その神業、そのあたたかさ。私は身動きもできず、見つめ続けました。

自分では寝返りができない花ちゃんを1時間毎にそっと動かして呼吸を守るのが、お母さんに一晩の熟睡を提供するのが、その夜の私の役目でした。責任感と緊張感で一睡もできないまま、私は夜通し花ちゃんのお世話をしました。そうしてやっと朝を迎えられた時、私はついお母さんに「毎晩たいへんですね」と声をかけてしまいました。それは、指導員の方から軽々に発してはいけないと言われていた言葉でした。「しまった」と思った瞬間、私の声に振り返ったお母さんは「いいえ、この子は私の天使ですから」ときっぱり言われました。しかも笑顔で。まるでひまわりの花のように、明るく凛とした笑顔で。お母さんが、重度の知的障害を持つわが子を「天使」と呼ぶまでに、どれ程の苦勞をしてこられたかは計り知れるものではありません。ですが、その「天使」を育てる中で、お母さん自身もまた「天使の母親」として育てられてきたことは、明らかなことだと思いました。

それから、いくつかの夏が過ぎて、私も母親になりました。初めての子育ては、思いもよらぬ「たいへん」続き。ミルクをあげても、オムツをかえても、一生懸命あやしてみても、泣き止まない娘に、苛立ちと、悲しみと、絶望感がこみ上げてきます。「もう、イヤ！」と目をつぶった時、花ちゃんのお母さんの声がありました。「この子は私の天使です」と。私も声に出して言うてみました。「この子は私の天使です」「この子は私の天使です」「この子は私の天使です」。目を開けると、腕の中にまぎれもなく天使がいました。それから、子育てが辛くなる度に唱えては、救われた幸せの呪文。あのボランティアの日、救われていたのは私でした。

子育ての泣き笑い、親育ちの悲喜交々、そんな幸せを届けるために子ども達は産まれてきました。お子さんをギュッと抱きしめて、幸せの呪文を唱えてみてください。ほら、天使が。Merry Christmas !!